

とさま こ 殿様の子どもたちの暮らし

い　い　な　お　す　け
井伊直弼が、若いとき暮らしていたのは埋木舎でしたね。他の子どもたちはどうしていたのかな？

い　い　け　と　さま
井伊家の殿様の中には、子どもに恵まれなかった人もいれば、何十人も子どもがいる人もいます。子どもたちは、男の子は彦根、女の子は江戸に集められ、それぞれ成長していました。

彦根城下には、殿様の子どもたちが暮らす屋敷があり、そこで年の近い兄弟と生活しました。彼らをお世話する家臣（家来の武士）や女中たちもいて、子どもたちは、この人たちとともに生活し、成長していました。



殿様の子どもたちが学んでいた
中国の古典

あとつ
跡継ぎでない子どもたちも、行事に出席したり、親戚などとお付き合いをしたりするため、教養はきちんと身につけておく必要がありました。子どもたちは家臣から選ばれた彼ら担当の先生から、剣術、弓術、馬術などの武芸や素読（音読）・手習（文字の書き方を習うこと）などを学んでいました。幼いときは必須の科目を学びますが、成長するに従って、子どもたち本人の好む科目を、より深く学ぶようになります。



わつ、
漢字ばっかり！

教養として、
中国の古典が
大切にされて
いたんだ。

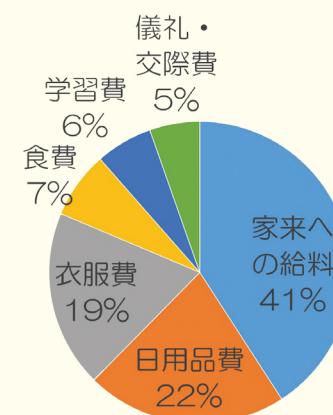
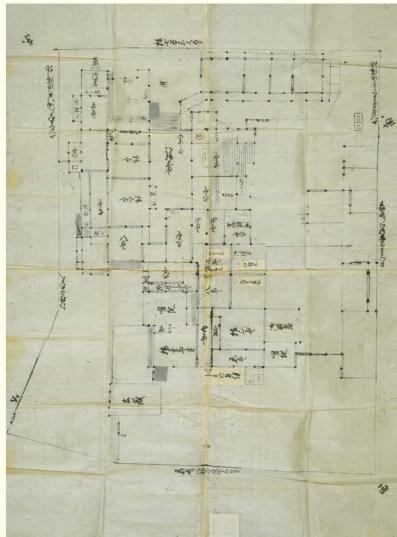


殿様の跡を継げるのは一人だけ。他の子どもたちはどうしたのだろう？



跡継ぎではない男の子は、他の殿様の家や、彦根藩の重臣の家の養子になるのが、一般的でした。それが社会で活躍する方法だったのです。女の子は、他の殿様や彦根の家臣の家にお嫁に行きました。

殿様の子どもたち
が暮らした屋敷の
図面



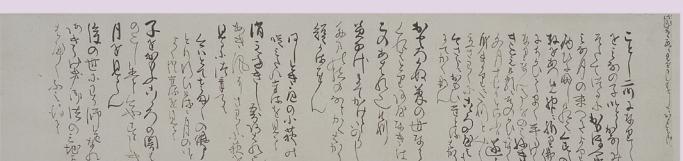
せいかつひ 生活費の使い道

子どもたちには藩から生活費が支給されました。グラフは、300俵が支給された11代井伊直中の子どものころの例です。

わが子を愛する直弼

い　い　な　お　す　け
井伊直弼は、自分の子をたいへんかわいがっていました。

二女の弥千代は、直弼にとってはじめて大きく育った子ども（弥千代の兄姉は生まれてすぐに亡くなっています）で、親戚に預けて育てられました。直弼は手紙で、弥千代の様



子を何度も尋ねていたり、「武家風に育ててほしい」などと書き送ったりしていて、娘のことを気にしていたことが分かります。

また、六女の美千代が亡くなったときには、悲しみの気持ちを和歌に詠んでいます（写真）。